九州大学学術情報リポジトリ
Kyushu University Institutional Repository

芥川龍之介と日本自然主義 : 小説中の自然主義表象およびその変遷

陳丁, 颶颺

https://hdl.handle.net/2324/7182555

出版情報：Kyushu University, 2023, 博士（学術）, 課程博士
バージョン：
権利関係：

KYUSHU UNIVERSITY

（様式３）

氏　　名　：陳丁　颼颺

論 文 名　：芥川龍之介と日本自然主義 ―小説中の自然主義表象およびその変遷―

区　　分　：甲

論　文　内　容　の　要　旨

一、問題意識と研究目的

芥川龍之介は、日本自然主義の無技巧性や平板な描写とまったく反対な立場にいる「新技巧派」として理解されてきた。自然主義文学と相容ない、徹底的な〈自然主義嫌い〉のイメージは根強く、日本自然主義と全く無関係ではないにもかかわらず、芥川文学の〈自然主義嫌い〉の一面だけが拡大され、一人歩きしていくのが現状である。

これまでの芥川と自然主義に関する先行論を概観すると、〈自然主義嫌い〉を一種の事実として検討する例は、汗牛充棟であるほど多くある。一方、〈自然主義嫌い〉からの脱出の糸口を提出した竹内真、高田瑞穂や駒尺喜美の論もあるが、両者の関係を対立に限定しない研究は明らかに少ない。芥川と自然主義を単なる対立ではなく、「対抗的な結託」[1]と明確に提起したのは松本常彦であり、両者の関係が決して薄くないとの指摘は示唆に富む。芥川と自然主義への再検討は、この「対抗的な結託」を基調とするのが効果的だろうと思われる。

本研究の目的は、上記の「対抗的な結託」という問題提起を受けて、〈自然主義嫌い〉の背後に隠れている芥川の自然主義理解を紐解くことである。具体的な方法としては、まず自然主義言説のデータ化によって、芥川の自然主義言説が辿った変化の軌跡を突き止める。それを踏まえて、具体的な作品論を通して芥川文学における「自然主義」の実相を捉える。

二、論文構成と各章概要

芥川の「自然主義」を考察するためにまず必要なのは、彼の言う「自然主義」とはどのようなものかを明らかにすることだろう。第一章では、芥川全作品中の「自然主義」表現、および自然主義作家名・作品名に言及したものをまとめた図表データをもとに、芥川の「自然主義」用法と、彼が取っている叙述の偏向を考察する。自然主義言説の量的研究を通して、〈自然主義嫌い〉の基本的態度こそ変わっていないが、自然主義に関する客観的な言説は、芥川の生涯を貫いていることがわかり、また、相対的ではあるが、自然主義に対する彼の態度に、ある種の旋回があったことも認められる。

第二章では「酒虫」（『新思潮』1919 年 6 月）を扱う。暗い世界や醜い自己をテーマとする初期作の系列に属するこの小説には、自然主義的な「醜い自己」の問題が、醜い〈酒虫〉という表象として引き継がれる。この醜い〈酒虫〉＝〈醜い自我〉を「福」か「病」とする考え方に、〈自己〉の問題を肯定か否定で単純化しようとした、唯美主義的傾向と人道主義的傾向の考え方の影響があると考えられる。「自然主義」や自然主義作家・作品名こそ直接出てはいないものの、「酒虫」は芥川の文

[1] 松本常彦「芥川龍之介と弱者の問題」、佐藤泰正編『梅光学院大学公開講座論集第 51 集　芥川龍之介を読む』笠間書院、2003 年 5 月、一七七頁

壇理解、およびそれと密接にかかわる彼の自然主義理解の総体を垣間見せる、象徴的な小説ではないかと思われる。

第三章で考察する「MENSURA ZOILI」(『新思潮』1917 年 1 月）は、悲劇を天秤で測量して優劣を判断するという、古代ギリシア喜劇作家アリストファネスの喜劇『蛙』の話からヒントを得たのだろう。天秤の測量で負けたエウリピデスの作品の特徴が、当時、田山花袋をはじめとする、『新思潮』派敵視の自然派の作品を彷彿とさせている。そこに、重さを芸術評価の基準とすることの滑稽さをそのまま小説に取り入れた芥川の、痛烈な自然主義批判が余すところなく表されている。「酒虫」とともに、自然主義が提起した問題を土台としつつ、自然主義文学と反対な立場にいる自分の在り様を確認する、専業作家になる前の芥川の姿勢をあらわにしている。

第四章では、「毛利先生」(『新潮』1919 年 1 月）と「あの頃の自分の事」(『中央公論』1919 年 1 月）について検討する。この二作はともに、「時」や「時代」を一つのテーマとして掲げている。1919 年頃の花袋文学も「時代」を強く意識していることから、「毛利先生」と「あの頃の自分の事」が「時代」をテーマ化することの背後に、自然主義文学が過去のものとして決算されていく当時の文壇状況がかかわっているのではないかと考えられる。

第五章で取り上げる「葱」(『新小説』1920 年 1 月）で、芥川は田中君の〈幻滅〉を自然主義的な「幻滅」として読ませる書き方、また『藤村詩集』やモデル問題といった要素を用意している。それらの要素に反応する自然派の批評家が無意味な批評をし、小説の最後のように、彼らがお君さんを退治するだろうことが想定されていると思われる。自然主義文芸と批評家を痛烈に嘲弄する、〈自然主義嫌い〉な芥川の面目をよく示す作品である。

第六章で考察する「三つの窓」(『改造』1927 年 7 月）には、これまでの時期とやや異質な、芥川晩年の自然主義文学観が仄見える。小説の話はいずれも芥川が実際に見聞したことか、実際の出来事をもとに書かれている。そのため、先行論で全くの虚構とされてきたこの小説は、ある程度、事実に基づいていることがわかり、あたかも「真」をスローガンとした自然主義文学に照応しているかのようである。また、K 中尉が見ていた、時には人道的に映ってくるが全体的には薄暗さを基調とする「人生全体」には、「三つの窓」とほぼ同時期の作品群でよく言及される国木田独歩と正宗白鳥の影響が認められる。芥川の自然主義言説の中で、最も積極的に自然主義を取り扱った晩年の言説を、「三つの窓」は事実性への意識と自然主義作家への理解を通じてその特徴を表出している。

本論の最後では、これまでの論述を振り返って、自然主義に対する芥川の態度が一貫して批判的なものでは決してないことを再確認する。芥川の自然主義言説は、〈自然主義批判と客観的態度の拮抗→自然主義批判が優勢→自然主義への客観的態度が優勢〉という趨勢を示しており、それぞれの時期に書かれた作品に、こうした傾向が多かれ少なかれ反映されている。また、自然主義への批判を主調としつつ客観的な評価も一貫して存在しており、本論で取り上げたいくつか小説がその偏向を窺わせている。さらに、芥川と藤村の関係を例に、芥川と自然主義の複雑なかかわりの一端を開示する。芥川と自然主義の関係と同様、両者は文壇デビュー以前の時期からすでに深く結びついており、また両者の関係性も決して、一貫して不変なものではないからである。